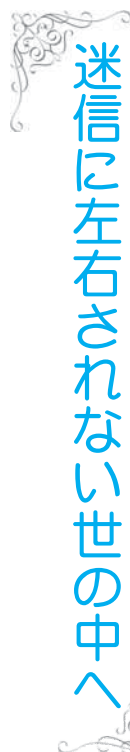
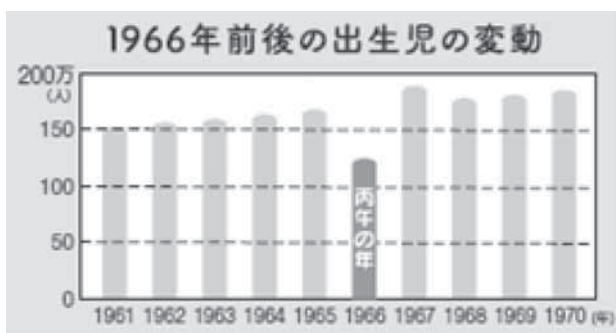


迷信に左右されない世の中へ



● 丙午(ひのえうま)に生まれるはずの命が

死亡はもちろん、出生にも、その時代の社会情勢は大きく影響します。例えば20世紀前半、日中戦争の世情不安により、出生数は大きく減少しました。その後の平和な時代に



「丙午(ひのえうま)」とは？

「十干」(甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の10種類)と「十二支」(子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の12種類)を組み合わせた年号を「干支」といいますが、丙午はその干支のひとつです。干支は「甲子(きのえね)」から「癸亥(きい)」まで60あり、60年を1周期としています。

ちなみに60歳を過ぎると「還暦」といいますが、これは60年周期の暦が終わり、元の暦に還ることから生まれた言葉です。



次の丙午の年は、8年後の2026年です。そのとき、わたしたちはまだ迷信にとらわれているのでしょうか。それとも…？

れるのは、「丙午生まれの女性は気が荒く、結婚すると夫を食い殺す」という迷信です。

● 丙午の迷信

も、ある年だけぽっかりと落ち込んでいます。昭和41年(1966年)、いわゆる丙午の年に、出世児が前年に比べて約51万人少なくなっているのです。戦争は不幸ながらも現実の出来事ですが、丙午には実体がありません。この落ち込みの理由で考えら

このような迷信は、江戸時代の初期から広まったといわれます。人々は「丙午生まれの女性は結婚しにくくなり、不幸になる」「自分の子どもが結婚できなくて困る」と考えました。そのため、丙午の年には「子ども(特に女の子)

は生みたくない。もし生まれても、前の年か後ろの年に生まれたことにしよう」と考えたと思われま

● 迷信や偏見

迷信や偏見は、「無知のためにとらわれる」というより、むしろ「知識をもつたためにとらわれやすい」という傾向があります。必ずしも「そのいわれが正しいと思うから従う」という人ばかりではないのです。いわれを全く知らなくとも、多くの人が丙午の女性を差別してきたことを知っただけで、その迷信に強く影響されてしまう人もいます。

● 次の丙午の年は

慣習は幸福を願い、不幸を避けるために生まれました。しかし中には、「みんながしているから」「昔からしているから」などの理由だけで、慣習にこだわっている人もいます。また、慣習にとらわれない人を、

「常識がない」と見る人もいます。このような見方が、人権侵害へとつながるのです。

「みんなが…」 「昔から…」 という理由だけで判断してはいけません。一人ひとりがその根拠を考え、さまざまな人を認めることが、人権尊重の社会につながるのではないのでしょうか。

次の丙午の年である2026年、親戚などから「丙午の子を生んでどうするとね」「なんで無理して生まんといかん」と言われるかもしれません。そのとき、同じことを繰り返さない世の中でありたいものです。

〈参考〉

「ならわし、しきたりと私たちの人権」(福岡県人権啓発情報センター、2016年)

問 教育委員会事務局

人権・同和教育係

☎ 0943・32・0093

(内線313)

広川町に残る城と館跡

鬼ノ口城 その2

甘木氏（鬼ノ口城主）の系譜は七代ではなく九代では

天正6年（1578）に記された「筑後領主附」『筑後将士軍談』所載を見ますと、

甘木紀伊守 甘木村 十七町とあります。「上妻文書」の中には甘木伊豆守の名があります。いずれも前号で示した系譜の中にはありません。『筑後将士軍談』には、甘木村七社宮に残っていたという棟札銘が収録されており、

- 文明9年（1477） 甘木河内守家氏（家恒）再興。
- 明応4年（1495） 西牟田左近将監再興。
- 永正16年（1519） 甘木兵部少輔安家再興。

とあります。

問題なのは最後の、甘木安家による再興です。永正16年と天正6年（日向耳川で父とともに戦死）の開きは59年あります。仮に15歳での再興とすれば、74歳での出陣ということになります。ましてやその父家棟の年齢はいくつだったかと、大きな疑問が生じます。

ちなみに『九州治乱記』などによりますと、筑後から出陣した諸将の中で最高齢だったのは柳川城主の蒲池鑑盛で、59歳とも60歳余ともいいます。

この年齢から比べて推考しても、74歳や90歳に近いとも思われる甘木親子の出陣には、疑問を抱かざるを得ません。

大胆な私見を述べさせて

ただけるなら、前号で示した系譜の安家と家長の間に、紀伊守と和泉守（親子か）の2人が脱落していると考えます。

この2人こそが日向耳川の戦で戦死した、甘木氏親子ではなかったと考えてなりません。そのように考えてみると、先述したような出陣の際の年齢的な疑問はおおかた解消します。

もう一つの根拠が、式部丞という官途名に宛てた、大友義長が出した文書があることです。式部丞は甘木家棟の官途名であり、大友義長は義鎮の祖父にあたります。

甘木紀伊守や和泉守に宛てた文書の差出人は大友義鎮で、耳川の戦を仕掛けた張本人です。このことから考えても、家棟は耳川の戦以前の城主の可能性が高いと考えます。

「天正軍記」や姫野家記とも呼ばれる「家訓」に記

述されている、家棟・安家親子については、先述したような年齢的な問題などから、考え直してみる必要があると考えます。

この疑問や問題点については、本紙昭和60年11月号で、「鬼ノ口城と甘木氏の謎」と題して、1回だけ取り上げました。それ以外、どこからも疑問は呈されていません。

それから33年経った現在、いま一度問題を提起し、皆さまからのご指摘を仰ぎたいものと思っているとこです。

（広川町郷土史研究会）



塚殿さん（草場区）
天正6年、日向耳川の戦に出征した甘木氏の重臣の一人、草場三五郎の供養墓

広川町古墳資料館だより

教育委員会では昨年度から、全国的に貴重な「直弧文」をテーマとした体験事業を行っています。しかし、直弧文と同じく忘れてはならないものが、古代文様「双脚輪状文」（写真）です。この形は、貴人にさしかけるパラソルや、南海産のゴホウラ貝の断面といわれています。

双脚輪状文は、闇に包まれた石室に葬られた地域の有力首長たちに、死後悪霊などがとりつかないよう、魔除けの意味があったと考えられています。また、この文様は全国の古墳4つに採用されており、その分布から、古代の筑前・筑後地域と肥後地域は密接な関係にあったと想像できます。この特殊なものが弘化谷古墳にある事実は一考を要するものです。

刻まれた「直弧文」と描かれた「双脚輪状文」は、広川町が誇れる古代の秀逸なデザインです。

